

琉球大学学術リポジトリ

学校教育の学習コミュニティを拡大する交流授業の
試み

～異学年や異校種間の遠隔共同交流学习を通して～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学生涯学習教育研究センター 公開日: 2008-07-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 真喜志, 昇, Makishi, Noboru メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6615

学校教育の学習コミュニティを拡大する交流授業の試み

～異学年や異校種間の遠隔共同交流学习を通して～

A Trial of Remote Exchange Class to Expand the learning community of School Education.

-Through remote exchange class between different grades or different types of schools. -

真喜志 昇

1. はじめに

近年、学力の低下やいじめ、自殺、不登校などの子ども達が増加し、知・徳・体のアンバランスやコミュニケーション能力の欠如、夢・希望のもてない子ども達が増えている。また、学校の教育力及び地域・家庭の教育力の低下が叫ばれ、教育の転換期であると言われ、「生きる力」や「人間力」の育成が叫ばれている。その「生きる力」や「人間力」に欠くことのできない必要条件是、「自ら学ぶ力」（自己学習力）と考えることができる。それも、単に教科の中だけで発揮される「自ら学ぶ力」ではなく、子ども達の生活全体の中で、子ども達が自分の思いや願い、さらには自分の夢を実現するために発揮される「自ら学ぶ力」である。それを育むためには、子ども達の自然や社会とかかわり合いを大切にし、その中で生まれる「疑問」から、自分の思いや願いを持たせ、自ら課題をみつけ、探求方法を考え、友達やいろいろな人と助け合いながら解決していくような活動を多く持つ必要がある。ただし、自分の生活を広げたり、地域社会に働きかけたりしながら、自らの人生を「創造」していくような「自ら学ぶ力」をどう育むかが課題だとも言える。

ところで、今までの学校教育においては、一つの教室にいる、40名以内の同年齢の子ども達によるグループの中で学習する活動がほとんどで、その他に学年全体や学校全体、縦割り学級やクラブ活動などの異学年グループでの学習が行われてきた。しかし、昨今、情報化社会・ブロードバンド時代という言葉に集約されるように、パソコンや携帯電話などで情報にアクセスすることが容易となり、入手した知識・情報を使って、もっと価値のある新しいものを生み出す創造性が強く求められるようになった。また、テレビ放送などの映像も、前に放送されたものはどんなものでもインターネットで見ることができるようになったりするなど、情報量はますます増えるばかりである。その上、世界的な規模の情報通信ネットワークを通じて、不特定多数のものが、双方向に文字、音声、画像などの情報を融合して交換することも可能となってきた。そのため、異学年や異校種間の世界規模での遠隔共同交流学习が行うことができるようになってきた。こうした試みは、より学校教育の枠を大きく捉え、生涯学習的な視点（タテの統合・ヨコの統合）で学びを作っていくことができると考える。

なお、ここでいう「タテの統合」とは、「乳幼児期から高齢期に至るまで、人間の一生涯に亘る各

発達段階の教育が、相互に関進づけられ、一貫性をもって積み上げられるようにする」ことであり、一方「ヨコの統合」とは、「生涯のどの時期にも、あらゆる生活関連における様々な教育機能が、有機的に関進づけられ、相乗的な効果を発揮するようにする」ことである。前者が、いわゆる時系列的な観念で、「垂直的統合」と呼ばれるものであり、後者が、空間的・物理的な横のつながりの観念で、「水平的統合」と呼ばれるものである。⁽¹⁾

以上のように、これからの教師は、学習内容を教え込むことの限界を知り、いかにいろいろな人と関わるような学びの場（タテの統合・ヨコの統合）を作り、「自ら学ぶ力」を育てるかが大切であると考えられる。本稿では、異学年や異校種間の遠隔共同交流学习を通して学校教育の学習コミュニティを拡大する交流授業の試みについてまとめてみたい。

2. 学習形態の可能性

さて、「はじめに」でも述べたように、これからの学校にあっては、一つの教室にいる、40名以内の同年齢の子ども達によるグループの中で学習する活動だけではなく、広い「学習コミュニティ」⁽²⁾による学び（タテの統合・ヨコの統合）を行う必要がある。もちろん、これまでのクラス内での学びが悪いというわけではなく、それはそれで基礎学力をつける上でも、自ら学ぶ力をつける上でも大切ではある。また、地域探索やいろいろな見学、地域の方を学校に呼んで、地域の先生として活躍してもらったりもしている。

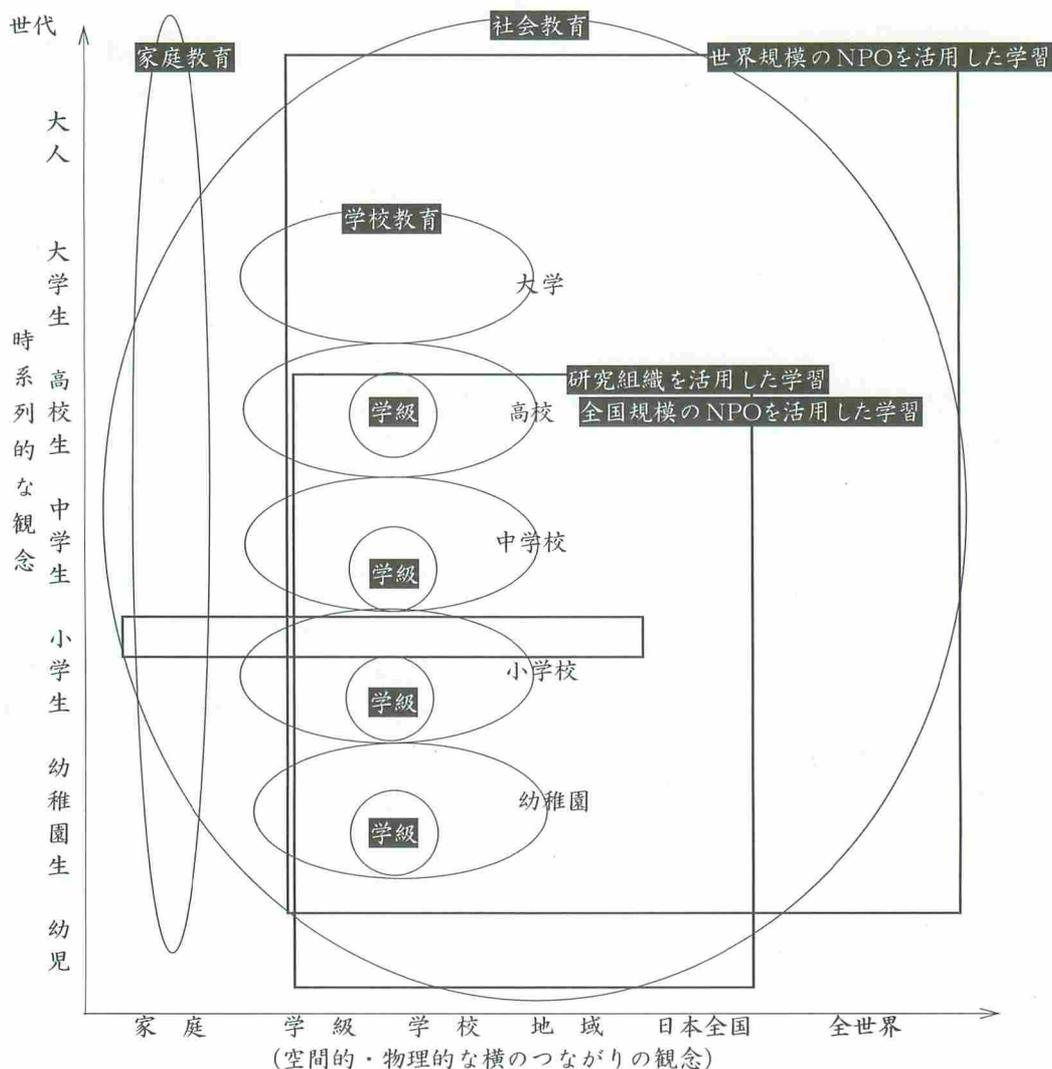


図1 タテの統合・ヨコの統合を意識した「学習コミュニティ」の構造

しかし、より広い視野を持ち、主体的にいろいろな人に関わり、いろいろな情報を集め、自分に必要な価値を選択し、自らの考えを築き上げていくには、より学習コミュニティを広げていくことが大切になると考える。学習コミュニティを広げることで、世の中にあふれる情報から、みんなで考え、真に必要な情報を取捨選択し、自らの情報を積極的に発信し得る、基礎的な資質や能力を身に付けること、すなわち、「自ら学ぶ力」・「生きる力」を育てることにつながると考える。これまでは、図1のように、「学習コミュニティ」として、家庭教育の学習コミュニティ、学校教育の学習コミュニティ、社会教育の学習コミュニティという場があり、学校教育は一部のコミュニティにすぎなかった。しかし、近年の情報化の進展により、異学年や異校種間・全国規模・世界規模の学習コミュニティを広げた、交流授業が可能になってきた。

以下、論者がこれまでに行ってきた勤務校での実践事例を紹介しながら、その可能性と課題を考察していきたい。

3. 「ヨコの統合」を意識した交流学習

まずは、「ヨコの交流」を意識した、同学年の他地域との交流授業を紹介する。子ども達一人一人が、主体的、創造的に「生きる力」を身につけるための一つに、ICTを使った授業である。子ども達自身がインターネットを使って、いろいろな資料の検索やテレビ会議システムの活用、電子掲示板やインターネットメール・コミュニケーションによる情報交換、ホームページによる調べたことの発信などを取り入れた授業である。

① 交流学習事例1 <旧具志頭村立新城小学校>

(交流校：福岡県福岡市立長尾小学校、新潟県見附市立上北谷小学校)

四季の変化をとらえることが難しい沖縄県で、教科書通りの教材や単元配置で授業を進めていくと、理科の意図する学習内容に到達できない状況下にある。具体的な例をあげると、涼しくなっても本県の野山には、紅葉や落葉などの急激な変化は見られない。また、渡り鳥は5月の下旬から6月の中旬にかけて種数や個体数が減り始め、9月上旬から渡り鳥が増え始めるなど、教科書の内容とは全く逆の現象が起きる。

そこで、四年理科の「すずしくなると」や「寒くなると」、「あたたかくなると」の単元では福岡県長尾小や新潟県上北谷小と普通の電話と同じようかけられるフェニックステレビ会議システムを使い、遠隔共同交流学習をした。6月に「タンポポはどうなっていますか」というこちらの子どもの問いに、福岡や新潟の子ども達がすぐ外からとってきて見せてくれたりした。このようなリアルタイムに福岡や新潟の季節の違いがわかることで子ども達の知的好奇心を刺激し、その後の自分たちの地域の自然を調べる意欲につながっていった。

また、2月に社会科「あたたかい土地と寒い土地」の遠隔共同交流学習を行った。一方では校庭にスキー場があり、雪で遊んだり雪に悩まされたりしたことの報告があり、一方では半袖で暮らし、暑い日も多いといったことの報告があった。このように、ここでも教科書とは違って、子ども達にとって極めてリアルタイムに、地域ごとの違いが理解できた授業になった。

② 交流学習事例2 <旧具志頭村立新城小学校> (交流校：埼玉県の越生町立梅園小学校)

埼玉県梅園小との遠隔共同交流学習では、沖縄からは、黒砂糖の作り方やシーサーについて、沖縄の気候や郷土料理などについて説明した。梅園小からは、特産品である梅干しの作り方や、埼玉の気候について説明していた。

この授業では、それぞれ工夫を凝らした説明に感心したり、その場で新たな質問が出たりと、楽しい雰囲気の中で授業が進んだ。その中でみんなで考え、真に必要な情報を取捨選択し、自らの情報を積極的に発信し得る基礎的な資質や能力を身につけていった。

③ 交流学習事例3 <琉球大学附属小学校>

(交流校：秋田大学附属小学校)

秋田大学附属小との遠隔共同交流学習は、学級紹介と、沖縄の生き物と秋田の自然を比べようということで、お互いにプレゼンテーションをしながら交流した。

沖縄からは、植物グループがクワディーサー(モモタマナ)の紙芝居を、自分たちでストーリーも創作して紹介したり、ガジュマルとキジムナーの劇をつくって見せたりした。

ハブグループは、アルコール漬けの標本のハブを見せ、秋田の子ども達をびっくりさせ、興味を持たせていた。金魚の赤ちゃんとグッピーを紹介

したグループは、ペープサートを使って、相手が飽きないで見てくれるように工夫していた。タイワンカブト虫を紹介したグループは、実際のタイワンカブト虫をカメラの前に近づけて見せたり、○×ゲームを入れるなど、工夫して発表していた。

秋田からは、雪が降ることや山羊を飼っているとの報告があり、沖縄の子から「いいな。」という声があがっていた。

この授業でも、地域の違う子ども達に、違いを明確にし、いかに相手にわかりやすく発表するかの工夫がみられ、意欲が喚起できた。

④ 交流学習事例4 <琉球大学附属小学校> (交流校：三重県志郡美杉村立太郎生小学校)

前述の交流学習事例1・2・3は、単発的な一時間ごとの授業だったが、これは、時間的スケールが大きくなった事例である。

三重県太郎生小とは、沖縄からはサトウキビとゲットウを、根も付けてまるまる一本を送り、太郎生小からはケナフをまるまる送ってもらい、お互いに本物を実際にさわったり、観察しながら説明を聞いた。ケナフの毛がすごいことや思ったよりも大きいこと、ケナフもゲットウと同じように紙になることにびっくりしていた。

また、その後、私たち沖縄では送ってきたケナフを、三重県太郎生小ではサトウキビを栽培し、その様子を報告しながら、地域の自然の違いを長期にわたって比較していくことで、それぞれの地域よっての植物の成長の様子の違いなどが発見できた。

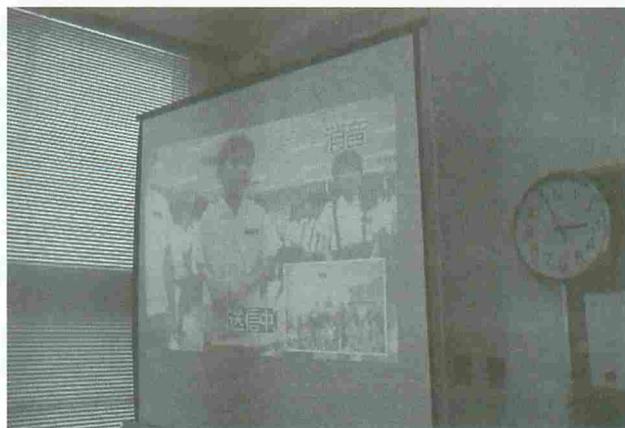
⑤ 交流学習事例5 <琉球大学附属小学校> (交流校：韓国ソウル日本人学校)

これは、事例4の時間的なスケールを広げた交流学習事例に、学習コミュニティを他国まで広げた事例である。韓国のソウル日本人学校と、eメールによる交流を行った事例である。

韓国からは、沖縄と同じような気候だと思っていた子ども達に、「大きな川が凍っている写真」をメールで送られてきた。子ども達の驚きはすごく、冬の韓国では大きな川が凍るくらい寒いことがわかり、より韓国に興味を持っていった。

附属小学校では、地図をもう一度見直し、位置の確認をしたり、韓国の風習や食べ物などのことをいろいろ調べ、沖縄との違いを比較する活動へとつながっていった。また、それを壁新聞にして送り合うなど、交流を深められた。

この交流は、子ども達の知的好奇心に火をつけ、自ら学ぶ力の育成につながった。また、他の地域と比較することで、より身近な地域のよさの発見ができた。



3. 「タテの統合」も意識した交流学習

以上の事例は、同学年での交流事例であったが、ここでは「タテの統合」を意識した、異年齢のコ

ラボレーションによる交流学习の事例を紹介したい。なお、ここでの事例は、すべて琉球大学附属小学校での実践である。

(1) 他県との異学年・異校種間プロジェクト「メディアキッズ」による共同学習活動

「メディアキッズ」⁽³⁾とは、インターネットを使った学校間プロジェクトのサイトである。そこは、全国の小・中・高校の子ども達が自由に交流していく場である。そのプロジェクトの一つに、平成9年からインターネットを使って雪像のテーマやアイデアを共同で考え、実際に雪まつり会場で製作する「SNOW SQUARE PROJECT (子ども達の雪の造形広場)」⁽⁴⁾という活動があり、琉大附属小学校でも、その雪像づくりに平成11・12年と、続けて参加した。

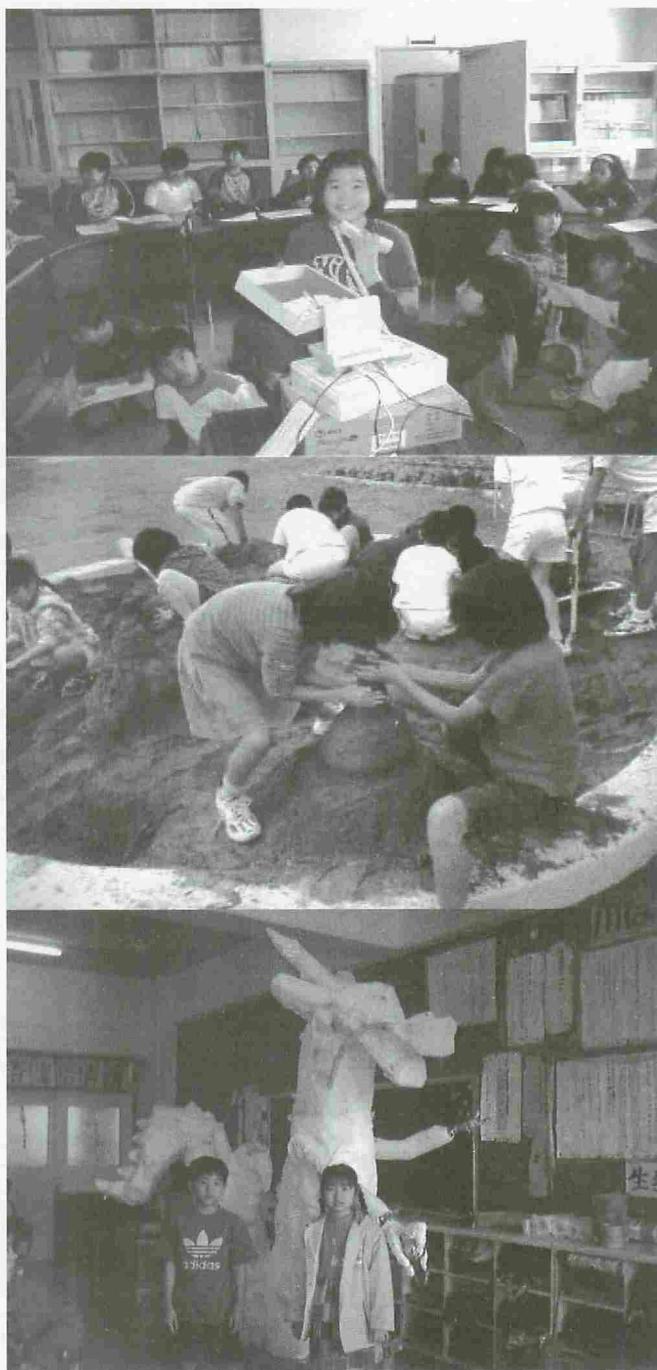
1年目は、子ども達は、メディアキッズのFirstClassを使ったネットワーク会議室で、シーサーや龍柱、図工の時間に作った粘土像など、雪像のアイデアやテーマを送り合いながら意見交換をした。ただ附属小学校では、FirstClassのサーバー接続でないため、一人一人の接続ではなく、論者がメールを紹介し、子ども達が返事のメールを書くという制限があった。それでも、一番若い小学3年生の送った首里城の龍柱が尊重され、北海道立新川高校の生徒が、それを元にアイデア像を考え、テーマも21世紀へ子ども達の飛躍を込めて、「未来への飛躍」に決定した。

附属小学校の方では、北海道の雪像に合わせて、3年各クラスとも、雪の代わりに砂で像を造ってみたり、ペットボトルや牛乳箱、段ボールなどで、龍の像づくりに取り組み、それをテレビ電話で紹介したりもした。

平成11年1月29日午後には、琉大附属小の3年生代表6名が北海道に行き、30日から大通公園で、北海道の新川高校、阿歴内小・中学校、神奈川県横浜市立大口台小学校、愛甲郡清川村立宮ヶ瀬小学校、神奈川大学附属中・高等学校の生徒と協力して、雪像製作に取り組んだ。休憩時には、雪にふれるのも初めての子供達が、雪合戦をしたり、雪だるまやかまくら作りに夢中になって、観光にも行かずに雪とふれあっていた。

翌31日には、三重県の太郎生小と沖縄の琉大附属小の3年生と、北海道にいる特派員が雪像の前でテレビ会議を行い、雪像製作の様子を紹介したり、北海道の気温などの様子やお互いの学校の様子、作った龍の像の紹介などをおこない、すばらしい交流ができた。

メディアキッズの子ども達と、雪まつりを通じた関わりで感じたのは、ネットの中だけの人と



人の結びつきだけではなく、このようなネットの中でしか知らなかった小・中・高校の子ども達が札幌に集まり、雪まつりで自分たちのメッセージを込めた雪像を、実際にふれあい製作するという共同作業やテレビ会議による交流は、子ども達にとっては、バーチャルではないすばらしい体験で、その前のインターネットによる交流がいきってくるものでもあると思った。

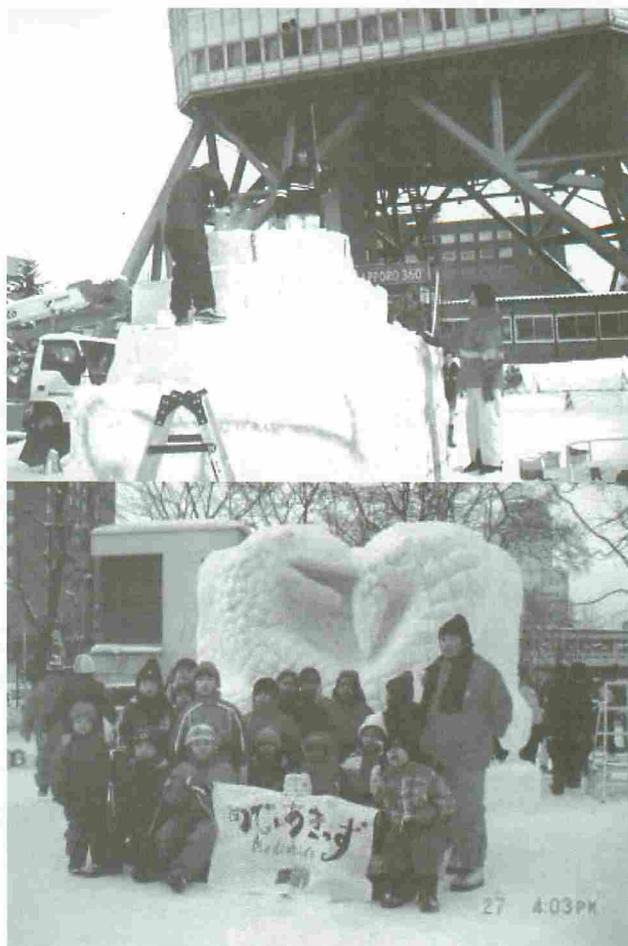
なお、この活動は、次に紹介するもう一つの、旧郵政省主催の「沖縄サミットインターネットメッセージリレー」（沖縄の良さや特徴を世界に紹介し、交流する）とともに、社団法人海外広報協会のテレビ取材もあった。このような活動をすることにより、他県や他国を知るとともに、より自分の郷土沖縄が好きになり、自分たちの誇りにもつながっていくと思われる。

ネットワークを使った共同学習にはさまざまな活動があるが、雪まつりのコラボレーションのように、小学生から高校生までの異学年の子ども達が協力し、オンラインの活動から実際の雪像製作のオフラインの活動へつながっていく取り組みは、新しい可能性を示していると言えるであろう。

(2) 他国との異学年・異校種間プロジェクト「VOTE」の交流共同学習

これは、郵政省主催のVOTEに参加した、異年齢・他国との学習事例である。2000年7月に沖縄でG8経済サミットが開催された時、G8サミットに先立ち、教育と情報をテーマとして、「オンライン・イベント」や「沖縄マルチメディア・キャンプ」、「インターネット・教育シンポジウム」、「沖縄発インターネット中継イベント」といったプロジェクトで行われたものである。VOTE (VOIce for The Earth) とは、「オンライン・イベント」の核となるプロジェクトで、2000年1月～5月にわたって行われたものである。VOTEプロジェクトの沖縄サミットインターネットメッセージリレーで寄せられた子ども達からの意見や関心、また、子ども達が考える課題などが、5月に開催される「インターネット・教育シンポジウム」に反映されるといった活動であった。

実際の授業は、まず「沖縄サミットってなんだろう。」という質問をし、サミットについて、ホームページなどを検索させ、その後、世界メッセージリレーでの他国の子ども達のメッセージを紹介した。また、メールをくれたアジアの人について考えるため、クラスの中国から転入してきた子どものお母さんやそ



のお母さんのお友達の人から、他のアジアの国（中国・ミャンマー・韓国）のことを紹介してもらい、その国について質問したりした。この学習では、他の国に関心を持つことができ、興味を持って自分たちなりに調べながら、他の国の子ども達とWeb掲示板などでメッセージの交換をし、平和や環境問題などについて考え、他のアジアの国を理解する活動に発展していった。

また、VOTEプロジェクトのインターネット・教育シンポジウムでは、ハワイ・台湾・韓国・オーストラリア・日本といった、多地点でのテレビ会議も行った。その国の紹介やゲーム、絶滅種の紹介などお互いの違いについて話し合った。この活動は、海外広報協会やNHKのテレビ取材を受けることで、子ども達はより意欲的に学習に取り組んでいった。

この交流学习では、どの国にも人々が生活していて、国と国は国境で分けられ、それぞれの国で文化や解決すべき課題は異なっているけれども、皆同じ地球という星に住んでいるのであるということ、またそのため、私たちには国境や習慣を越えて進もうとすることが重要であり、世界中の子ども達が環境、人口増加、食料不足、エネルギー危機などの問題に対する関心を持っていることがわかった。さらに、それをこのような学習によるコミュニケーションによって、また蓄積された知識を共有することによって、子ども達は相互の考え方を理解することができ、子ども達が地球の未来を確信できる解決策を考えるきっかけになったであろう。

VOTEプロジェクトを通じて、世界中の子ども達とそのような機会を持つことで、子ども達のコミュニケーション能力や「自ら学ぶ力」の育成につながり、世界各地からの参加により、ここでも他県や他国の文化を尊重すると共に、より自分の郷土沖縄が好きになり、自分たちの誇りにつながっていったと言えるであろう。

(3) 世界規模環境プロジェクト「ワールドスクールネットワーク」の共同学習

ワールドスクールネットワークとは、世界各地の学校・団体とともに、地球規模での環境教育プログラムを展開しているNPOである。自分の足もとでの深く多様な体験、プロジェクトサークル、子ども知恵図鑑⁵⁾、国際シンポジウムなどを通して、世界の仲間と中味のあるつながりをもてる多面的な学びを提供している。ここでは、社会科の「水のくらし」において、ワールドスクールネットワークの参加型オンラインデータベースWeb電子掲示板「子ども知恵図鑑」を使い、交流をした事例を紹介する。

ある日、Web電子掲示板「子ども知恵図鑑」に、徳島県山城町立山城中学校より、「今学校にある蛇口の数を数えてきました。その結果、僕たちの学校には134個の蛇口がありました。予想以上に蛇口の数が多かったのが驚きました。皆さんの学校はどうですか。良かったら、教えてください。」というメッセージがでたので、私たち琉球大学附属小学校も数えたら220個もあった。各学校の数をまとめると、次のようになった。

・琉球大学附属小学校	蛇口数220個 児童699人
・徳島県山城中学校	蛇口数134個
・岡山県榎邑小学校	蛇口数80個 児童37人
・山梨県平和中学校	蛇口数51個
・イスラエルのクファール・カッセム中学校	蛇口数28個 生徒630人
・イスラエルのヨベル中学校	蛇口数36個 生徒640人

そこで、イスラエルのヨベル中学校から、「なぜ日本の学校にはそんなにたくさんの蛇口があるのですか？」と、返ってきた。沖縄の学校の蛇口は220個なのに、イスラエルでは36個である。なぜそんなに違うか、みんなは目を輝かし、すぐに話し合いになった。その結果、次のようにまとめ、報告した。

「私達の、全校生徒は870人ぐらいです。蛇口の数が多いのは、休み時間の10分の間に、トイ

レにいたり、水を飲んだりする人が多いからです。あと、掃除のときに、ぞうきんを洗う人が多いからです。」

すると、すかさずイスラエルからは、

「休み時間は2つの授業ごとに20分あるので、これだけの蛇口でも十分です。それに、家から水をペットボトルに入れて持ってきていて、授業中でも飲むことができます。また、自分たちでは掃除はしないのでわからないのですが、ぞうきんを洗うときに、みなさんは蛇口の水を流しながら洗っているのですか。それとも、バケツに水をためて、その中で洗っているのですか。」

という返事が来た。私たちはその返事を聞いて、水をとても贅沢に使っていることが分かったし、国の違いで学校生活がだいぶ違うことがわかった。また、web掲示板での話し合いで、他の学校がリサイクルや節水に頑張っていることを知り、自分達の暮らしを見つめ直し、節水するにはどうするかといった活動を考え、実践活動へとつながっていった。

次に資料1は、総合的な学習で、「放置自動車」について、Web電子掲示板「子ども知恵図鑑」を使い、交流をしたものである。まず、私たちが放置自動車について学校探検で調べたことをWeb電子掲示板に報告し、情報を募集した。すると、山梨県の平和台中学校から不法投棄されたゴミの報告や、栃木の青木さん（環境教育専門の大学の先生）や徳島県の山城中学校から、「家の近くにも放置自動車があるが、沖縄のようにたくさんはない。」という報告があった。

そのような報告を受けて、子ども達は「なぜ、沖縄には放置自動車が多いのか」と、もっとや

資料1 Web電子掲示板での交流の様子

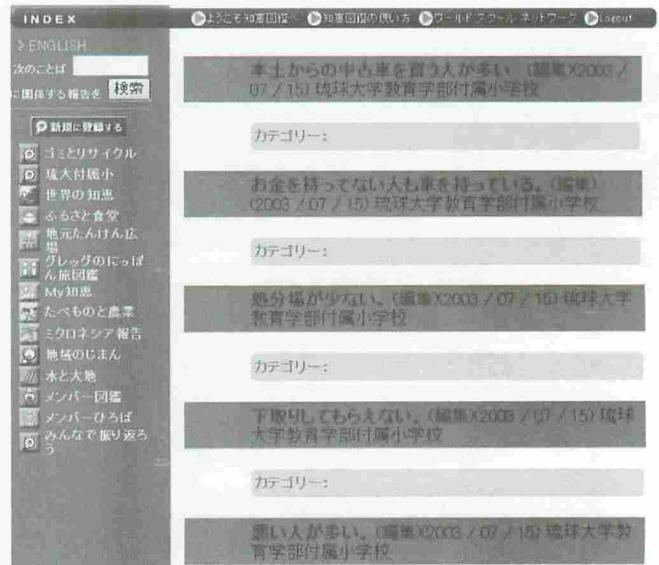
る気を起こし、自分の課題をいろいろなところ（宜野湾警察署、真栄原交番、浦添警察署、宜野湾市役所、西原市役所、大学の総務部、近くの車屋さん、琉大附属小の事務室、副校長先生外職員、父母、おじさん・おばさん）に行き、インタビューをし、みんなで話し合った。

次に、「放置自動車が沖縄に多いのはなぜだろう」という課題についてみんなで考え、資料2のように、Web電子掲示板にまとめてみた。資料3が、それをまとめたものである。その中で、沖縄だけがとても多いのだから、他の県と比べて沖縄だけにある理由を考えていこうということで、話し合いをした。

「一家に2・3台持っている人が多いから沖縄は車が多い。」とか、それに対して「車が多いのは沖縄だけではない。東京に比べて沖縄は、人口が少ないので車は東京の方が多し。」、というような反論があったりした。また、「この辺には中古車屋さんが多し、東京や名古屋、大阪などから中古車を持ってくるっていったから、沖縄の車は中古車が多いんだ。」、という意見もあった。それをうけて、「他県はまだ新しいので廃車にせず、中古屋さんに売るので沖縄は中古車が多いので、廃車にする車が多いんだ。」という意見がでて、みんな納得した。

また、その外にも「電車がなし」ということにも話が及び、「そうそう大学生も車を持っている人が多いね」ということに気づいた。「そうだ、お金がない人も、車を持たないと沖縄では不便だよな。」といていた。「沖縄はお金があまりない人も車を持つので、廃車にするお金もあまりなくて放置する人が多いんじゃないか」ということになった。最終的には、資料4のように、6つの理由が考えられるということで、全員で確認した。

このように、Web電子掲示板を使うことで、いろいろなところから返事やアドバイスなどが返ってきて、もっと調べたいとか、活動しようという意欲が高まり、学級の学ぶ雰囲気も高まった。また、そのような異空間の交流（今ま



資料2 Web電子掲示板での理由

- 1 お金が必要だから（かかるから）
- 2 テーゲーという言葉になれているから
- 3 電車や地下鉄がないから
- 4 捨ててばつをうけない場所もあるから
- 5 廃車にするお金がないから
- 6 だれかがやってくれると思うから
- 7 なんぎして働いてまで、払いたくない
- 8 1988年から車を捨てるときにお金がかかる法律ができたから
- 9 草が多いから
- 10 しゃけんのお金もったいないから
- 11 ほかの県より車が多いから！
- 12 処理するのがめんどくさいから
- 13 空き地が多い
- 14 悪い人が多いから
- 15 処分するお金がないから
- 16 処分場が少ないから
- 17 つくる？（売る）会社が多いから
- 18 一家族に車が二・三台あるから
- 19 悪いガスでこわれる原因になる
- 20 下取りしてもらえないから

資料3 沖縄が放置自動車の多い理由

沖縄が放置自動車が多い理由	
・処分場が少ない。	26人
・中古車を買う人が多い	13人
・「テーゲー」とか「ナンクルナイサ」	8人
・下取りしてもらえない。	6人
・電車がなし。	2人
・お金を持っていない人も車を持っている。	2人

資料4 話し合いの結果（人数が一番の理由）

での場所や時間に制限された交流とは違った場所や時間にとらわれない交流)を通すことで、活動がどんどん広がりを見せた。

たとえば、ゴミを減らす方法を考えるグループ、ゴミ人形やゴミの再利用を考えるグループ、マイバックを推進するグループ、海のゴミ拾いを計画するグループなどの活動グループができて、イスラエルやアラスカなどの中学生や高校生と一緒にの学習活動に発展していった。

また、年度のまとめとして、東京で各地域や各国の仲間(小学生から大人まで)が集まり、国際シンポジウムを行った。子ども達が地域の自然や地球環境のために何ができるかを考え行動した様子を、一年の成果として発表しあった。通信でつながった子ども達が、実際に顔を合わせることで、「自ら学ぶ力」の育成の機会となった。

The screenshot shows a website interface with a navigation menu on the left and a main content area. The main content area features a title 'どうしたらマイバックを使ってもらえるでしょうか。' (How can we get you to use my bags?) and a sub-header 'スーパーでマイバックを売りました。' (We sold my bags at the supermarket.). Below the text are two photographs showing people at a supermarket. The article text discusses the author's experience of selling their 'my bags' at a supermarket to reduce waste and mentions that they were sold out.

4. おわりに

以上、異学年や異校種間の学習コミュニティの拡大での、遠隔共同交流学习の試みについて説明してきた。この試みは、学校教育の枠を大きくとらえ、生涯学習的な視点(タテの統合・ヨコの統合)で学びを作っていくことができることを証明している。しかし、まだまだ第一歩にすぎず、課題も多くあることを付け加えておきたい。

いずれにしても、成果としては、異学年や異校種間の学習コミュニティを拡大することで、子ども達が今までの教室中心の学習に比べ、同じテーマで活動する他の地域の子ども達に自分たちの活動を報告するために、それぞれの地域で身の回りのテーマについて意欲的に調べるなどし、課題への興味を深めることができる。また、受け取ったメッセージにコメントを返すなど、ネットワークを通してやりとりすることで、地域のつながりと多様性に目を向け、多様な生き方を知ることができる。また、これからの社会のあり方を模索でき、新たな行動へと発展させていける可能性がある。

課題としては、「インターネットで他地域・世界と交流すること」だけが、目的になるといけないということである。自分の足もとでの、深く多様な体験があるからこそ、他の仲間と中味のあるつながりがもてるのである。また、それらの体験を共有するために、文字のやりとりだけでなく、写真やビデオなどを活用したり、さらに直接顔を合わせる催しを行なうことで、よりコミュニケーションが図られ、「自ら学ぶ力」を育成できる。また、日本と海外との交流のやり取りなどは、翻訳ボランティアの方々の協力を得てしか実現できないし、このような参加型オンラインデータベースのweb掲示板での活動は、環境教育に関心のある大学生ボランティアや大人の関わり、NPOなどの社会教育団体の協力が必要である。

最後に、学校教育の学習コミュニティの拡大による学習形態は、協力学校やいろいろなNPOや関係団体との「学社融合」が必要であり、また、インターネットなどの活用だけではなく、実際に顔を合わせてのミーティングやシンポジウムなどがあつた方が、教育効果はさらに高くなるといえる。いずれにせよ、教室中心の学習だけでなく、地域参加の学習はもちろんのこと、学校の学習にこのようなインターネットを活用とした形態を積極的に取り入れ、学習コミュニティを拡大し、子ども達の学習を変えていくことが必要であると考えます。

<註>

- (1) 「タテの統合=vertical integration」と「ヨコの統合=horizontal integration」の双方の原理は、周知のようにP.ラングランが提唱した、いわゆる「生涯教育 lifelong (integrated) education」の主要原理であった。井上講四『生涯学習体系構築のヴィジョン』学文社、1998年、p. 70に拠った。
- (2) ここでいう「学習コミュニティ」とは、学習を行う集団や場などをいい、たとえば小学生から大人までのいろいろな機関や団体なども含む規模の、学ぶ集団・場などをいう。
- (3) 「メディアキッズ」は子供達の生活にコンピュータを溶けこませるため、日本のアップルコンピュータ社が環境を提供して始まった、子供達が文字・音声、映像を自在に操り、積極的にコミュニケーションするデジタル・ネットワークによる全国規模の学校間交流モデルで今は活動していない。
- (4) 「メディアキッズ」の一つのプロジェクトで今は活動していない。
- (5) 「子ども知恵図鑑」とは、子どもたちが自分たちの体験や発見をできるだけ簡単に発信し、世界の仲間と共有することができるように工夫した、参加型オンラインデータベースである。ワールドスクールネットワーク (WSN) の活動の、インターネット上の現場となる。